

第2章 人間と動物の間 1. 人間の言葉を習得した動物たち

彼我の差——再考

欧米では、しかも女性としてはきわめて稀な“虫好き”として少女時代を過ごし、アメリカ自然史博物館勤務を経て、現在は映画制作者になっているジェシカ・オーレックによれば、アメリカでは、昆虫に関心をもっていることがわかると、それだけで露骨に嫌がられるという。そのような体験に基づいて、「ユダヤ・キリスト教の生命観では最下位に置かれている虫の地位を向上させることを使命」^[註1]にしている (Kaminski, 2009, p. 8) オーレックは、日本人が古事記の昔から虫好きであったことを知って感激して来日し、そのことをテーマにした映画 *Beetle Queen Conquers Tokyo* (「甲虫の女神、東京を征服」) を制作した (Myriapod Productions, 2009)。ちなみに、この映画には昆虫好きで知られる養老孟司も登場する。

そのオーレックの言葉を借りれば、「日本の人々は虫たちのはかない生命に美を感じることができる」のに対して、アメリカにはそのような文化がないという (朝日新聞, 2010年6月20日夕刊「ひと」欄)。紀元前4世紀のアリストテレスに端を発する、「人間を中心においた西洋思想の動物観」(パターソン, リンデン, 1984年, 10ページ) が支配しているためである。この認識は、前章の註4に引用した小泉八雲の指摘と瓜ふたつである。百年以上が経過し

[註1] 今西も、オーレックと同様の発言をしている。西洋では、デカルトの「われ思うゆえにわれあり」という主張からもわかるように、人間の意識をこのうえなく尊重しているわけであるが、そのような考えかたが西洋世界に広く浸透した結果として、「動物たち、トリやケモノは人間と同じようにものを考えないと、だからあいつらには心はないんだといわれて、動物たちの立場が非常にわるくなっているんやね。これを何とか救いたいというのが僕の念願の一つですけどね」(今西, 1987年, 151ページ)。今西の自然観の根底には、このような考えかたがあるのである。

でも、その差が縮まることはなかったことになる。

前章の冒頭でも述べたように、わが国と西洋では、このように生命観が太古の昔から根本的に異なっており、その違いがそのまま現代にもち越されているのである。オーレックは、上座部仏教（いわゆる小乗仏教）やヒンドゥー教の思想である輪廻転生にも少女時代から関心を寄せていたという（Kaminski, 2009, pp. 8-9）が、こうした思想では、ユダヤ・キリスト教思想とは異なり、自然と人間を対立した存在として眺めるのではなく、同じ自然の中で生きる、ある意味で同列の存在と位置づける。今西の著書のひとつである『生物の世界』の英語訳^[註2]（RoutledgeCurzon, 2002）のタイトルが、*A Japanese View of Nature: The World of Living Things*（『日本の一自然観——生き物の世界』）となっているのも、両者の自然観の違いを反映したものなのであろう。^[註3]

わが国では、今西や小田柿進二、柴谷篤弘、梅棹忠夫、岡田節人^{ときんど}、日高敏隆、西田利貞、池田清彦を筆頭として、後に生物学者になった昆虫少年は枚挙にいとまがないが、おそらく欧米ではそうではない。後に血縁選択説を唱えた英国の理論生物学者、ウィリアム・ハミルトンなどの例外はあるにし

[註2] これは、アルバータ大学の人類学者、パメラ・アスキスが、当時、国際日本文化研究センター教授であった川勝平太（現、静岡県知事）らの協力を得て英語訳したものである。アスキスは、ケンブリッジ大学に留学中に、たまたま今西の存在を耳にし、日本の霊長類研究の創始者として強い関心を寄せていた時、やはり同大学に留学していた、今西の生物学に詳しい川勝と出会った（Asquith, 2002, pp. xix-xx）。そのことが機縁となって、まだ今西が健在であった頃に京都大学に留学し、それを契機に西洋の読者との橋渡しをするようになるが、その一環として、この著書を英語訳したのである。今西の研究に関するアスキスの貢献については、別著（『人間の「つながり」と心の実在』2020年、すびか書房）第1章に詳述しておいた。

[註3] 後にチンパンジーに手話を教える研究で有名になるロジャー・ファウツは、カレッジで動物心理学の講義を受けた時、この問題に関係する興味深い経験をしている。その教科を担当する教授は、動物は心のない生き物で、その行動は本能によって支配されているだけであり、動物が人間に似た意識をもっているという考えかたは迷信にすぎないと断定的に講義するのを聞いて、生家の農場で動物たちと親しく接しながら成長したファウツは、自分の「子どもじみた動物観を恥ずかしく思い、人並み以上に熱心に」、そうした客観的姿勢を身につけようと努めたというのである（ファウツ、2000年、20ページ）。

でも、圧倒的多数は、最初から、生物を研究の対象としてとらえるのであろう。わが国でも、昔と違って最近では、捕虫網を持った子どもたちの姿を見かけることがほとんどなくなってしまったが、デパートやスーパーマーケットで甲虫の成虫や幼虫とともにその飼育セットがふつうの商品として販売されているのを見ると、甲虫を飼育する子どもはまちがいなく増えている。

こうした彼我の差を考えると、わが国の生物学者の中から、欧米のものとは根本から異なる進化論や生物学が誕生したとしても、少しもふしぎではない。実際に今西は、「長いあいだにわたって培われた彼我のあいだの自然観のちがい、あるいは生物観のちがいといったようなものが、彼我のあいだの進化論のちがいとなって、反映しているのではなからうか」（今西、1986年、90ページ）と述べている。

その違いの現われのひとつが、餌づけをして人間に慣れさせ、個体ごとに命名したうえで識別するという方法（個体識別法）に基づく、今西グループによる野生動物の長期継続観察であった。動物の個体識別を初めて実施したのは、東南アジアでアカゲザルの観察をした、アメリカの比較心理学者、クラレンス・カーペンターとされるが、今西は、都井岬の半野生馬の観察で個体識別を始めた時点では、そのことを知らなかった（今西、1976年、79ページ）。ただし、同じ個体識別といっても、今西のものは顔形で識別して個体ごとに名前をつけるのに対して、カーペンターのものは、いったん捕獲して腿に数字の刺青をすることで、それぞれを識別していたのである（Carpenter, 1942, p. 115）。両者では根本的な考えかたが全く違っている。私たち日本人には考えにくいことであるが、カーペンターは観察が終わるとその個体を撃ち落とし、胃の内容物を調べて標本にしたのである（松沢、2001年、28ページ）。

その後、世界の霊長類研究をしばらく牽引してきた今西のグループや、今西による生物社会学の真の後継者たる小田柿進二^[註4]によって、わが国独自とも言うべき生物学が生まれたのも、そうした背景があるためなのであろう。今

[註4] 今西の進化論や小田柿の生物社会学については、前著『今西進化論と小田柿生物社会学』（2020年、アマゾン・オンデマンド版）に詳述しておいたので、関心のある方は参照されたい。

西は、種社会という概念は西洋の科学者には理解できないことをくり返し強調している（今西，1974年，168ページ；東山，今西，江上，日野，1983年，122ページ）が，それには，それなりの理由があるのである。

ここで問題になるのは，西洋世界が生み出した科学という方法論に関係するふたつの側面である。西洋の科学知識を十全に習得していた今西は，厳密な客観的観察という科学的方法論に則りながらも，欧米への留学が必須とされていた時代の風潮にあえて逆らい，初期の時代を除いては，西洋の思想から多くの点で距離を置いていた。それに対して，科学発祥の地たる西洋の研究者たちの側が，未だに違いは少なからずある（Cohen, 2010）にしても，次第に歩み寄り，今西流の方法論をとり入れるようになったのである。この問題については，別著（『人間の「つながり」と心の實在』）で述べておいたが，ここでは，野生のボノボの研究をしていた古市剛史（京都大学霊長類研究所教授）の所見を引用しておきたい。これは，**カンジ**という名前のボノボ（かつてのピグミーチンパンジー）を対象にした観察や実験を通じて，類人猿の言語習得に関する研究で世界をリードしてきたスー・サヴェージュ＝ランボーの著書『カンジ——言葉をもった天才ザル』（1993年，NHK出版）の解説として書かれたものである。

アメリカでのサルの言語能力の研究は〔その〕方法にほんの少しでも問題が見つければ，サルの言語能力そのものが否定されてしまうのだ。こういった傾向は，欧米の文化的伝統によるところが大きいように思う。キリスト教的世界観の影響を強く受けた欧米では，人とサルとの距離を縮めるような研究には，日本では考えられないほど強い抵抗が示されるのだ。〔中略〕

できれば人とサルとの距離は大きなものであって欲しいと願う欧米と，人とサルとが近い存在であることにそれほど抵抗を感じない日本で

[註5] サヴェージュ＝ランボーは，カンジというボノボによる人間の言語習得に関する共著書（Segerdahl, Fields & Savage-Rumbaugh, 2005）の扉に，今西と伊谷純一郎への献辞を掲げている。生きた霊長類研究の最大の源流は，やはり今西にあるのである。

は、サルを見る目が最初から違っている。実際サルの研究が始まった頃には、日本と欧米の研究のスタイルはまったく異なったものだった。今ではそういう違いもだんだんなくなってきたが、人間の最後の砦である言語能力の分野では、欧米の研究者の批判の目はまだまだ厳しい。(古市, 1994年, 237-238 ページ。傍点=引用者)

サヴェージ=ランボーも、共著書の中で次のように述べている。動物たちが自分たちの世界とその世界における役割をどのように感じとっているかなどの「問いかけが許されるべきなのだ。これこそが、動物の行動についての科学のあるべき姿ではないだろうか」(サベージ=ランバウ, ルーウィン, 1997年, 334 ページ。傍点=引用者)。

このように、まだ一部に留まっているとはいえ、欧米の研究者の側が、わが国の自然観のほうへと、ほとんどはその淵源を語らないままではあるが接近してきているわけである(ドゥ・ヴァール, 2003年)。ところが、わが国では、科学という学問分野が導入された明治初年から現在に至るまで、依然として事態を錯綜させる要因が存続している。それは、わが国の生物学者は西洋の概念や知識体系をそのまま取り入れたにもかかわらず、ごく少数の例外を除いては、科学の精神と言うべきものを未だ自家菜籠中のものにしていないという皮肉な現実である。そのことは、^[註6]超常現象を筆頭とする異端的現象に対する態度に最も明瞭に現われている。

その心理的背景には、何を権威とするか——つまり、西洋発の定説を権威としてそれに忠誠を誓うか、それとも自らが観察した事実のほうを“権威”とする(ひたすら事実寄り添う)か——という大問題が、一部にせよかわっているに違いない。ここには、本書の主題にも関係するきわめて重要な要因が潜んでいる。かけ値のない観察事実を裏打ちとして、既存の権威に反

[註6] 京都大学動物学科では伊谷や河合雅雄と同窓で、国際発生生物学会の会長を長らく務めた岡田節人は、この問題について次のように述べている。「科学という分野では明らかに後進国であったわが国では、科学の評価の基準はもっぱら実用への利用度なのであって、人間の創造的行為として科学を評価することはまったくないのであることに改めて驚かされます」(岡田, 1983年, 30 ページ)。

旗を翻すことこそが、科学的探検すなわち真の創造活動の真髄だということである。定説という権威は、いつまでもその地位に留まることはできない。それこそが、宗教的信仰と一線を画するところであり、科学という方法論に基づく知識の進歩ということなのである。

この問題を考えるうえで参考になるのは、まさに今西自身による発言である。今西は、その考えかたの基盤にあるとされることの多い西田幾多郎の哲学について、「哲学のことども」という1971年に書かれたエッセイの中で、次のように述べている。

哲学といっても、西田さんや田辺さんの哲学は、西洋哲学である。哲学には、論理でコチコチの西洋哲学のほかに、もう一つ、東洋人の思想を反映した、東洋哲学というものが、あってもよいのでなかろうか。鈴木大拙と親交があり、禅をやられたという西田さんは、この東洋的思想を西洋哲学の論理によって表現しようとされたのであろうが、それはちょっと無理なことであり、けっきょくは失敗におわったのでなかろうか、という気がする。(今西、1973年b、177-178ページ)

続いて今西は、東洋的な哲学は、理屈ではなく、生活している中で自然にしみついた自然観や人生観や死生観などと結びついており、そういうものであれば、深い浅いの違いはあっても、東洋人なら誰しもがもち合わせているのではないかとしている。双方の文化の相違を反映して、根底にある宇宙観がそもそも異なることを指摘しているのである。そうであれば、それこそ東洋的な思想を基盤とする生物学が生まれなければならないことになる。

さらに言えば、いずれの思想とも無縁な生物学が成立する可能性も、当然のことながら考えなければならない。その場合には、双方の文化的背景から離れ、観察された事実のみに基づいた知見の積み重ねから、自然に生まれ出るものを待つことになる。その時に問題になるのは、自らに内在するフィルターを無自覚のうちに介在させることで事実を歪めてしまう危険性が、少なからず存在するということである。いずれかの文化圏に生まれ育った以上、それを完全に防ぐことは、もしかすると不可能に近いのかもしれない。そう

であるとしても、あるいはそうであるからこそ、できる限り客観的な基準を使うように注意しながら探究を進めて行かなければならないのである。

前章に引き続いて本章でも、このような両陣営の相違点を念頭に置いて、人間と動物の交流にまつわる研究に焦点を当て、その方向から、人間と高等動物ではどこがどのように違うのかという問題を検討することにしたい。氏か育ちか——つまり、どこまでが先天的なもので、どこから先が後天的なものなのか——という疑問は、昔から最も重要な検討事項のひとつになっているが、両者の間に明瞭な線を引くことは、今なお非常に難しい。意識の問題や、それと密接な関係にあると思われる言語の問題もそのひとつである。

たとえば、生成文法理論を提唱して、それまでの言語理論を一変させたと言われる【註7】ノーム・チョムスキーは、「もし動物が言葉のような生物学的に有利な能力をもっているにもかかわらず、それをどういうわけか今まで使わなかったのだとすれば、教えられれば空を飛べる人間たちが住む孤島を見つけるようなもので、進化論的にみて奇跡的なことだろう」(Golden, 1991, p. 20 : Patterson & Linden, 1982, p. 113 も参照)と、皮肉を交えて主張している。言語は人間特有の生得的なものであり、動物には獲得できるはずがないと考えているわけであるが、この論法には、それ以前に、事実をありのままに見ることを拒絶し、既存の知識に基づく演繹を優先するという、先述の深刻な問題が潜んでいる。

それに対して、類人猿に人間の言葉を教えてきた研究者たちは、一様に反論している。特に、カンジを乳児期から自分の子どものようにして接してきたサヴェージ＝ランボーらは、チョムスキーの想定している言葉は経験的なものではなく、現実の場面から遊離した観念的なものであるが、それに対

[註7] チョムスキーの理論について、アメリカの科学ジャーナリスト、ユージン・リンデンは、「情熱的な唱道者というものは、利用価値が失われた後でも、長いあいだ一つの理論を主張しつづけることができる」として、次のように述べている。「彼は沈没しかけた深層構造の船を二〇年ものあいだ浮かせている。それというのも、彼の恐ろしいほど卓越した頭脳と、どこであれ、また、誰とでも、彼の考え方に挑戦するものと喜んで議論しようとする態度のためである」(リンデン、1988年、63ページ)。チョムスキーの理論に対しては、わが国の言語学者、田中克彦による徹底した批判もある(田中、1990年)。